

2011.07.24 聖別会

IMMANUEL

インマヌエル
中目黒キリスト教会
聖別会マンスリー



2011年

<岩上敬人「パウロの生涯と聖化の神学」より>

①「何に『献げる』のか？」

テキスト：

「あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。」（ローマ 6:19）

本書の特色：「聖書神学的な聖化」のアプローチ

ローマ書における聖化の教え（1）：6:15-23 は二つの奴隷システムの比較から、聖化について述べている。奴隷とは、①主人に身をささげ、主人に従順である、②主人には奴隷を支配する力がある。ささげる対象によって二つの生き方がありうる（16節）。

A. 罪の奴隷

- ・かつて（救われる前）は、皆罪の奴隷であった（19節）。
- ・つまり、罪と不法と汚れに自分をささげ、
- ・その結果、死に向かって進んでいた（21節）。

B. 義の奴隷

- ・信仰者は、伝えられた教えに心から従うことによって、罪から解放され、神の奴隷となった（17-18節）。
- ・キリストは十字架と復活によって罪の支配を無効とした。しかし、罪の力が消滅したわけではなく、今もこの世にあって働いている。信仰者といえども、罪の奴隷として手足を再び罪に対して「ささげ

る」自由を持っている。実際、パウロは、ローマの信徒の中に罪の奴隷に戻る危険性を見ていた（12-13 節）。

- ・ だからこそ、パウロは、信仰者に対して、神の支配に身をささげ、キリストの時代に相応しく聖潔に進むように勧めている（13, 22 節）。
- ・ 聖潔に進むとは、①神の支配への献身によって、神と義の奴隷としてその力に従順になること、②律法から解放されたものとして、キリストの律法に仕えるものとなること、③肉の力から解放された者として、御霊の原理によって生きる者となることである。パウロにとって、罪を犯さない信仰者が標準的クリスチャン像である。
- ・ 恵みが罪を犯す言い訳として使われるべきではなく、信仰者を罪の力から解放し、罪を犯さずに生きる力を与える（15 節）。
- ・ 義の奴隷の行く先は永遠の命である（23 節）

[纏め] ローマ 6 章の聖化とは、自分自身を神にささげて、罪の支配から離れ、道徳的に成長することである。